

# ダークイシユの戦略転換

白杵 陽

IS（イスラーム国、以下ダークイシユ）が二〇一四年六月二九日のラマダーン明けに一方的にカリフ制の復興を宣言してから早一年が経過した。ダークイシユを取り巻く中東地域における政治的状況はほとんど変わりがないが、ダークイシユは六月三〇日、パレスチナ／イスラエルを研究する立場から興味深い宣言を、例によってSNSを通じて発信した。

その宣言によれば、ダークイシユはイスラエルを名指して非難し、ハマース（イスラーム抵抗運動）とファタハ（パレスチナ解放運動）をも同時に殲滅の対象として言及したことがある。この宣言の背景には、ダークイシユがシリアのダマスクス郊外にあるヤルムーク・パレスチナ難民キャンプを二〇一五年四月、その実効支配の下に置き、相当数のパレスチナ難民に対して斬首などを含む処刑を行ったという事実がある。その際、ダークイシユはヤルムーク難民キャンプで起こっていることはパレスチナにおいても起こると予告しているのである。もちろん、ダークイシユの行ってきたことにその予兆がなかったわけではない。例えば、二〇一五年二月、シリアのダークイシユ支配地域内にやって来た東エルサレム出身の一九歳のパレスチナ少年をイスラエルのモサドのスパイとして処刑したことを、SNSを通じて公開したことなどである。

ダークイシユを語るとき、その攻撃の直接的な標的がシリア派ムスリムに限定されてきたことがこれまで指摘されてきた。実際、イラクにおいてはシリア派政権に対する攻撃がもっぱらであった。これは、

ダーイシユが同じムスリムを「カーフィル（背信者）」と呼んで、タクフィール（背信者だと断じること）として一方的に宣言して、ジハードの対象としてきたという「革命的ジハード論」という背景があるからである。つまり、タクフィール論は、異教徒に対するジハードのみならず、同胞ムスリムをも攻撃対象とすることをイスラーム法的に正当化するやり方であった。だからこそ、ダーイシユはイラクやシリアのシリア派政権を、同じムスリムであっても「殲滅」しようとしているのである。当然、シリア派のうちの十二イマーム派であるイランもその例外ではない。

一方で、ダーイシユに対して空爆を行っているアメリカやアラブ諸国を含む有志連合軍に関しても、ダーイシユが捕虜にとった攻撃国に属する国民を残忍な方法で処刑し、それをSNSで流すというやり方で報復している。攻撃に加わったヨルダン軍のパイロットであるムアーズ・アル・カサースバ空軍中尉を火刑に処したことは、イスラーム法的には合法化できないがゆえに、中東イスラーム世界に激しい衝撃を与えることになった。

たしかに、ダーイシユがシリアとイラクの国境をまたがった実効支配地域以外の場所にまでその活動の範囲を広げていくのは時間の問題だと考えられていた。実際のところ、その代表例がナイジェリアのボコ・ハラムであるが、そのようなムスリム政治組織がダーイシユに忠誠を誓うというかたちでテロ活動を行うという事件が中東イスラーム世界各地で頻発している事実は、やはり看過できないであろう。パレスチナに隣接するエジプト領シナイ半島でもアンサール・バイト・アル・マクデイス（エルサレムの支援者）と称するダーイシユ支持のムスリム政治組織が、イスラエルとエジプトによる封鎖状態にあるガザ地区にも影響力を増しつつあるといわれている。ガザのパレスチナ人は二〇〇四年夏のイスラエルによる攻撃による破壊から復旧していない中で絶望のどん底にあり、そんな若者たちがダーイシユに吸収されていくという世界共通の構図が浮かび上がってくるのである。

以上を念頭に置くと、ダーイシユがイスラエルおよびフアタハのみならず、同じイスラーム主義政治組織であるハマースをも殲滅の対象として挙げたことは、ダーイシユの戦略の転換点を示しているの

かもしれない。というのも、ダーイシユは、アブー・ムスアブ・アッ・ザルカーウィーによって設立されて以来、親米穏健派アラブ諸国政府やシーア派ムスリムなどの「近い敵」をそのジハードの対象としてきた一方で、アメリカ合衆国やイスラエルなど「遠い敵」を十字軍と呼んでジハードの対象としてきたアル・カイダとは、テロ戦略については一線を画してきたからである。にもかかわらず、ダーイシユがいよいよアル・カイダの「人気」凋落と相まって、ダーイシユとアル・カイダのテロ戦術の違いがいよいよあいまいになってきており、ダーイシユもアル・カイダのようなグローバル・テロリズムと呼ばれるような国際レベルでのテロを展開することになるのであろうか。

〔表紙写真〕

キエフ独立広場

(二〇一四年五月、服部倫卓撮影)

〔目次写真〕

ドネツィク(ウクライナ東部)における親口派のデモ

(二〇一四年三月、大串敦撮影)